

下西代2号墳

—二重の石室を持つ古墳—

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



北西から見た2号墳 現地表面との差はほとんどなく、墳丘は完全になくなっていた。

京都市の西郊、大原野では今、一つの注目すべき古墳の移築復元が行なわれています。下西代2号墳と呼ばれるこの古墳が立地する大原野地域は、乙訓丘陵によって京都盆地とは隔てられ、また、西には丹波高原に連なる小塩山を中心とする西山山地がそびえています。この地域は北西から南東へ緩やかに傾斜する標高が60～90mの丘陵状の台地を形成しています。

大原野の山麓では、これまでに古墳群を6群以上確認していますが、これらはいずれも標高100m

以上の高所に分布しています。一部壊されてはいるものの、高く盛られた墳丘の形状を残し、一目で古墳とわかるものも多くあります。

しかし、下西代古墳群は、現在水田や畑として利用されている低所の小丘陵に造られたため、高く盛られていた墳丘は耕作などにより完全に削平され、地上にはその痕跡を残していませんでした。その下西代古墳群の存在が明らかになったのは、1989年、大原野南春日町の水田の圃場整備にともなう調査によるものでした。調査区の一

部の水田直下に、古墳時代後期の円墳の主体部である、横穴式石室の基底部ではないかと思われる石列が残っていたことによって本格的な調査を行なうことになり、1基の円墳が姿を現しました。この発見により、さらに新たな古墳の存在が予測されたため、下西代地区全域を対象に10ヶ所の試掘トレンチを設定して古墳確認調査を行ないました。その結果、先に発見した古墳の東50mの地点で、石室の石材とみられる大石が、粉碎された状態で見つかりました。



石室を羨道側から見る 奥に見えるのが小石室。

発掘調査では、石室の入口部分は削り取られていたものの、南東に向かって開口する横穴式石室の基底部を発見しました。この石室も、やはり古墳時代後期の円墳の主体部であり、先の古墳と同じひとつの群を形成するものと考えられるため、当地の字名から、最初に発見した古墳を下西代古墳群1号墳、次を2号墳と名付けました。

この2号墳の石室の形態は両袖

式で、玄室を上から見ると両側の側壁が外側にややふくらむ胴張り状を呈しています。石室の大きさは全長が13 m以上で、そのうち玄室の長さは3.8 m、幅は1.8 m、羨道の長さは8.2 m以上、幅は1.0～1.2 mあります。石室の開口方向は、真南よりやや東を向いています。墳丘の盛り土は完全に削られていましたが、北西側には周溝の一部とみられるくぼみが残り、

また東側では現在の水田の畔が墳丘裾部の形を踏襲していたことから、墳丘の直径は20 mあまりを復元することができます。石室内からの出土遺物は土師器・須恵器の土器類がほとんどでしたが、金環・銀環などの装身具も見られました。

以上の結果だけを見ると、下西代2号墳も、他の古墳時代後期の群集墳の中の古墳と同じような形態・内容を示しています。しかし、この2号墳には通常見られる石室形態とは大きく異なる所がありました。それは死者の棺を収める玄室に、さらに小さな石室が構築されていたのです。この小石室の大きさは全長が2.6 m、幅は0.5 mで、西壁は3段、東壁は2段、石材は小形ながら本体の横穴式石室と類似した石積みが残っていました。

奥壁は外側の横穴式石室と共有し、入り口にあたる南側は粘土で閉じられ、その上に平石を2枚重ねていました。奥壁を除く石積みの周囲は小礫まじりの粘土で固められ、南側はなだらかに傾斜しています。また、床面にはすきまなく石が敷かれています。小石室内からは金環と鉄製品の2点が出土しましたが、残念ながらこれらはいずれも原位置をはなれた埋土からのものでした。

いずれにしてもこの古墳は、木棺あるいは石棺が安置される玄室に小石室が構築されるという特殊な形態をもっており、これはその被葬者など、この古墳の成立した背景を考えるうえで興味深い事実であると言えるでしょう。

(加納敬二)